二松學舍大學
父母会報

平成５年5月10日創刊
平成21年3月31日発行
（第64号）
二松学舍大学父母会
（本　部）東京都千代田区三番町６番地16
（事務局）千葉県柏市大井2590
〒277-8585 TEL 04(7191)8756
二松学舍大学柏教学課
題字は
故 観山貞廣常吉先生書

卒業を祝す

父母会長　山岡英夫

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。明日からは、社会に出て職に就く者、引き続き学問をしてゆく者、さまざまな道があると思います。みなさんは、明治十年十月十日創設の「漢学塾二松学舎」に始まる「東洋の精神による人格の陶冶」という建学の理念、「漢学的教養」を人材養成の基本理念とする教えを受けた者として、ひとり一人が、世のため人のため、そしてなによりも自分自身のために頑張ってください。

いつの世も常に変化しています。今、経済情勢は、大変厳しい時です。辛抱しなければならない時も多々あると思います。そんな時こそ、恩師の教えを自らのものとして活かす時でもあります。辛抱を希望へと変えていってください。それをできるのが君たちです。やりがいのある、生きがいのある、自らの人生を、自らの行動で、あきらめることなく、つくっていってくれることを念じています。親は、いつでも君たちの幸せを祈っています。しかし、親は、いつまでもいるわけではありません。今度は、君たちが親になる番です。君たちの未来に祝福を。

卒業生のご家族のみなさん、おめでとうございます。本会に対するこれまでの多大なご支援ご理解に、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。卒業生のご父母のみなさんは、お子様の卒業をもって父母会を卒業ということになるわけですが、本学には、「二松学舎大学後援会」があり、後援会に入会することにより、引き続き二松学舎大学とのご縁を保ち続けることができます。ぜひご検討ください。そして、父母会に対しても、引き続き助言・応援をしていただけると幸いです。

本学教職員の皆様には、日頃より大変お世話になっております。学生に対し、公私にわたる親身なご指導をいただき、本当にありがとうございます。改めて深く感謝申し上げる次第です。

卒業を祝し「贈る言葉」

学長　今西幹一

卒業生の皆さん、ご父母の皆様、おめでとうと月並みながら心を籠めて祝意を申し上げます。

各個に進路を定めて社会に参入するのですが、これも常套的ながら、皆さんを迎え入れる社会は決して甘いものでない、相応の覚悟をもって進んで欲しいと思います。

私たちは鍋底景気といわれた時期の卒業で、就職口に窮したものでしたが、この度は「昭和恐慌」を思わせる、未曾有の経済の沈滞、低迷の只中の卒業で、内定取消し、門戸の狭小化という事態を招いています。幸い本学は担当者の努力で、例年並みの就職率を達成、内定取消しも現在のところ最小数にとどまっています。

世界的な経済不況に陥っていますが、煽情的なメディア、その上に乗る軽口な経済学者・評論家・アナリストは別にして、丁寧に情報を整理し、状況を分析しますと、世界各国で日本経済はまだしも最も「健全」だと言え、信頼に足ると言えます。早くも自動車産業は、生産台数等の下方修正の見直しを始めています。

大切なことは、ニート、アルバイトの自由、束縛のなさを礼賛するような風潮を脱し、もう一度勤勉な社会を再構築し、それぞれの場で真面目に地道に努力する生の価値を取り戻すことが大切と思います。

終わりにこの三月末をもって、私は学長職の任期を終え、二松學舎を去ります。その間、父母会から多大な支援を得、ご厚情をいただいたことを感謝申し上げます。今後とも大学教学との友好な関係を維持し、父母会の堅実な発展を祈ります。

卒業生に贈る

理事長　大山徳高

卒業生のみなさん、おめでとうございます。社会へ大きく羽ばたく時が訪れました。これまで培われた力を十二分に発揮され、ご活躍されますことを祈っております。また、ご家族の皆さまには、お祝い申し上げますとともに、これまで本学へお寄せ頂いた、ご理解とご協力に対し厚く御礼申し上げます。今後とも末永いご厚情のほどお願いいたします。

さて、卒業生の皆さんもご存知の通り、世の中は世界的不況の最中にあります。生きるのに大変苦労する時代です。大きな志を抱いて社会へ勇躍しようという皆さんには過酷な現実が待ち構えています。厳しい現実との対峙によって、志を曲げざるを得ない場面に多々遭遇するだろうと予想されます。志を果たすことの難しい時代であり社会です。こういう社会ですから、敢えて申し上げたいことは、青年の心に燃え上がった志を捨てないで頂きたいということです。迂回せざるを得ないことがあっても、今抱いている志を忘れずに抱き続け、実現する日を望みながら日々を過ごして頂きたいと願っております。そのことが、皆さんを一層成長させる力になると信じている者です。

若さと高い志を武器に、混迷する時代を切り開き、人々に安寧を齎す人材を社会へ送り出す誇りを噛み締めています。皆さんのご健康とご多幸をお祈りします。

卒業生のみなさんへ

文学部長　野村邦近

卒業おめでとうございます。大半の人にとって大学は、最後の学園生活であったでしょう。いよいよこれから長い社会生活が始まります。大学時代に何をつかんだか今はまだ明確に出来ないかも知れませんが、社会に出てから時を経るがごとに次第にわかってきたり、懐かしく思い返されるだろうと思います。

わたしたち教師にとって嬉しいのは、数年ぶりに卒業生の成長した姿に接することです。大学の四年間においても、まだ高校生のあどけなさを残す一年と、すっかりリクルートスーツが似合ってくる四年では、その成長ぶりを感じますが、なんといっても社会の荒波にもまれていく一年一年は大きく、顔つきが変わってくる姿をしばしば目にします。孔子は〝三十にして立つ〟と表現しましたが、やはり一人前になるには学校を出てから数年を要することになるのでしょう。

さてこの三月、卒業式でみなさんを送り出すと同時に、わたくしも三十五年教師として勤めた二松學舎大学を退職いたします。わたくしは本学の昭和四十一年の卒業生、この父母会報の前号に「私の学生時代」という一文を寄せましたが、時代は異なっても楽しい学生時代であったことにかわりはありません。これからはみなさんとともに「松苓会」の一員としておつきあいすることになるでしょう。

みなさんの社会人としての発展に大いに期待しています。

卒業生に贈る

国際政治経済学部長　鈴木朝生

卒業生の皆さん、御卒業おめでとうございます。我が国際政治経済学部も早いもので開設から十五年以上が経ち、私のゼミからも多くの卒業生が社会に巣立って行きました。その内の何人かは、きまって一年次の「基礎ゼミ」生でもあった学生達ですが、それが、もう彼らを送り出す季節になったのかと思うと、大学で過ごす四年間は長いようで実は瞬く間に過ぎてしまうのは、今も昔と少しも変わらないのだと実感します。

私は常々、若い頃を過ごす「大学」とは、「事柄の本質を見抜く眼」や「モノを考える力」を養う《場》であり、教員にはその「切っ掛け」や「材料」を学生に与える責務があると考えていますが、私ども国際政治経済学部の教員は、全員が全力でこの役割を果たしているものと確信しています。

皆さんのこれからの人生は決して平坦ではなく、そこには多くの困難が待ち受けています。教育とは人から「教わること」であると同時に、また「自己教育」でもある以上、教わったことの中で何を活かせるのかは、つまるところ自分自身に掛かっています。皆さんには、この大学、この学部で得られたものを財産とし、苦境や逆境にも怯むことなく、かえってそれを「試練」と受け取るくらいの気構えを持って、問題に立ち向かって行ってもらいたいと思います。何事にも全力で取り組むことと、常に自己研鑽さえ怠らなければ、切り開けない道など決してありません。以上を、私からの「贈る言葉」としたいと思います。

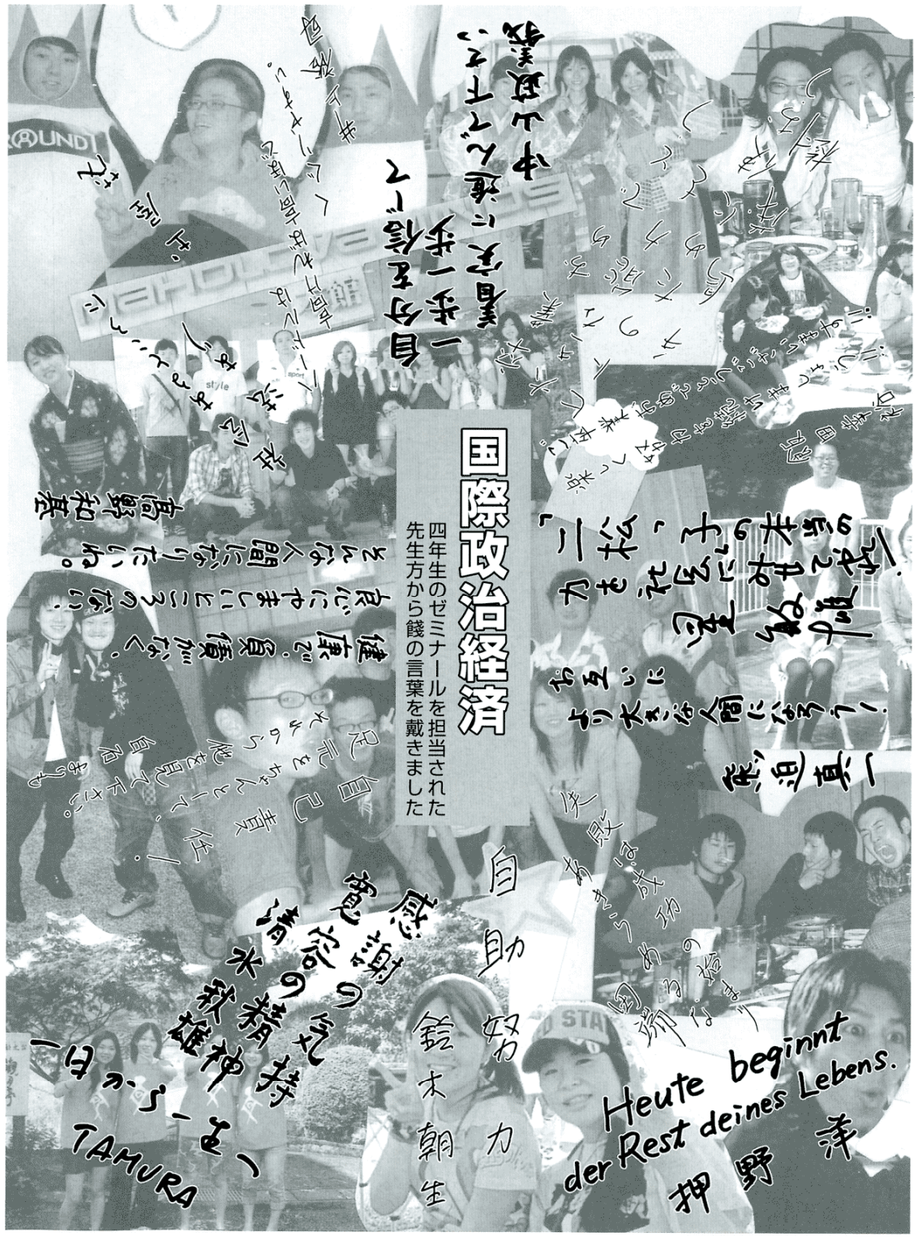
国文学

四年生のゼミナールを担当された先生方から餞の言葉を戴きました

高岡万葉まつり
第18回 万葉集全20巻朗唱の会

中国文学・比較文学・文化

四年生のゼミナールを担当された先生方から餞の言葉を戴きました



平成20年度

卒業式

平成二十一年三月二十五日(水)、九段会館大ホールにおいて、平成二十年度二松学舎大学学位記授与式が挙行されました。

九段会館の入り口には開場前から着飾った卒業生達が詰め掛け、晴れやかな笑顔でお互いの卒業を祝福し合い喜びの声をかけあっていました。

午前十時、演壇右手には来賓・学校法人二松学舎役員、左手に大学の教員が着席。志村教学課長(司会)の開式宣言で始まりました。

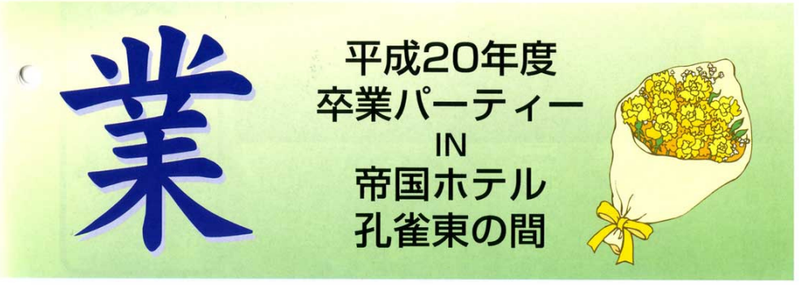
一同による国歌斉唱、渡邊学務局長の学事報告に続いて学士（文学・国際政治経済学）の学位記・卒業証書（文学部四七五名・国際政治経済学部二二八名）が授与されました。

また、成績最優秀者に中洲賞（両学部各学科一名）の授与、教育職員免許状が伝達されました。

その後、今西学長の告辞、大山理事長・神津松苓会長の祝辞が続き、祝電披露の後、在校生代表の送辞、卒業生代表の答辞、校歌斉唱と滞りなく進み、終始厳粛な雰囲気の内に授与式を終了しました。

今日を境に社会人として新たな一歩を踏み出す卒業生に拍手を贈りたいと思います。

平成二十一年三月二十五日（水）、午後二時より帝国ホテル「孔雀東の間」において、平成二十年度卒業パーティーが開催されました。文学部・国際政治経済学部の卒業生と大学の教職員・法人役員が加わり、広い会場のあちらこちらに所狭しと華やかな輪ができ、共に祝い合い、語り合い、話に花が咲き、楽しい中にも別れを惜しむ一時を過ごしました。



卒業にあたり、新しい人生への、希望に満ちた門出に胸膨らませている学生三名に、四年間学んだ学生生活を振り返り、現在の心境及び感想等を語っていただきました。

『出会いと成長』

文学部国文学科
勝俣　大

四年間の大学生活、それは本当にあっという間に終わってしまった。自分達の入学式が昨日のことであったかのような錯覚を抱きながらこれを書いている。二松学舎大学に入学する前、私は非常に大きな不安を抱えていた。本当に自分は大学という大きく広い環境でやっていけるのか。この不安は入学式が近づくにつれ大きさを増していった。しかし、大学に入学し、毎日を忙しく過ごす内にこの不安は徐々に薄れていった。その大学生活でまず最初に苦労したのが、自分で一年間の講義スケジュールを立てるということだ。それまでは自分の前に示された道をただ歩くだけだった。それは非常に小さなことではあったが、誰の手も借りずに自分の一年間を決めるということは私にとって一つの成長とも言うべきものだった。

大学生活一年目は、新しい環境に慣れることで精一杯だったため、これといって自分から何か新しいことに挑戦することもなく、毎日を平凡に過ごしていた。そのような平凡な生活に慣れてしまったためか、大学生活二年目も一年目の時と同様に何一つ成長することなく終わってしまった。そんな私が大きく成長するきっかけとなったのがゼミでの仲間達との出会いだ。

私は瀧田浩先生のゼミを選んだ。この選択はかなり以前から決めていたことだ。大学一年目、二年目共に瀧田先生の講義を受け、瀧田先生の講義の楽しさはもちろんのこと、瀧田先生の人間的魅力にも惹かれ、私は瀧田先生のゼミに入ることを決めた。私達瀧田ゼミ四期生は私を含め二十六人という大所帯だ。この二十六人の仲間の一人一人から、私は多くの影響を受けた。それまでは勉強といえば一人でするもので、一人で資料や本を読み、一人でレジュメを作成し、一人で発表、提出をする。しかし瀧田ゼミに入ってからは、三人から四人のグループを作り、皆で力を合わせて一つの結論を導き出すという勉強に変わった。一人一人が意見を出し合い、ただ自分達が考えていることを他のゼミ生に伝えるのではなく、自分達の考えを伝え、そして理解してもらうために、全てのゼミ生が文学と真正面から向き合っていた。この文学に対する姿勢は自分達の発表を作成する時だけでなく、他のグループの発表を聞く時にも見られるものだった。

そんな二年間のゼミでの生活の中で卒業を控えた私が今一番に思い出すのは、三年の夏に行われたゼミ合宿だ。その時は志賀直哉の「暗夜行路」という作品をいくつかの場面ごとに割り振り、皆で読み解いた。同じゼミになってまだ五ヵ月程度ということもあって、どこかよそよそしい雰囲気で始まった合宿だったが、三日間行動を共にすることで、皆の周りにあった壁が合宿最終日にはなくなったように私には思える。勉強や文学に関することだけでなく、自分の様々なことを互いに教え合い、互いを理解する。このことこそがあの合宿で得られた最大の収穫だったのだと思う。

今、四年間の大学生活を振り返ってみると、この二年間のゼミでの時間はこれまでの私の人生の中で最良の時だったと言えるだろう。こんなにも気の合う仲間達と、こんなにも濃密な時間を共に過ごすことはもうないかもしれない。だからこそ、私はこの二年間を忘れることはないだろうし、これからも機会を見つけては皆で集まると思う。

今年の四月から私は学生ではなく、社会人としての生活を始める。社会人になれば学生の時とは比べものにならないほどの責任を背負うことになるだろう。そんな生活を控えた今、私は少しも不安を抱いていない。それはおそらく、四年間の大学生活の中で多くの人達と出会えたおかげなのだと私は思う。

『二松学舎で得たもの』

文学部中国文学科
亀田幸男

五年前、大学受験に失敗した私は、毎日予備校に通う浪人生活を送っていました。当時は就職に有利かもしれないという安易な理由から何となく法学部を志望していましたが、予備校の授業で先生が漢文を中国語で読み上げた時に、中国語の響きや美しさに感動を受け、大学で中国語を専攻することを決心しました。ですから、中国語教育に伝統と実績のある二松学舎に合格した時はとても嬉しかったです。私の四年間の大学生活は、柏キャンパスに往復五時間かけて通学するなど幾分苦労した事はあったが、充実して楽しいものでした。それはやはり好きな事を思い切り勉強できたからだと思います。二松学舎に入って一番学びたかった中国語に関しては、これでもかという位思う存分学習する事が出来ました。四年間で履修した中国語の授業数は二十四科目、四十八単位分になります。学習し始めた当初は、ピンイン、発音、四声といった基礎的な部分で悪戦苦闘する毎日だったが、先生方の熱心な指導のおかげで次第に中国語に慣れていく事が出来ました。特に一、二年次の大橋先生には、発音と四声を鍛えて頂き、中国語を学習する上で必要な基礎力を固める事が出来ました。学年が上がるに連れて演習の授業が増えた事で、自分の中国語での表現の幅が広がり、語学力が着実に伸びていくのを実感しました。憧れの中国語がだんだん自分のものへとなっていくのはとにかく楽しいものでした。毎年冬休みには大学で学んだ中国語を試すために、中国や台湾へ旅に行きました。切符を買ったり、食堂で注文したり、日本で普段当たり前に出来る事でも一苦労でしたが、大学で学んだ中国語を駆使して現地の人と意思を通わせる事が出来たときの喜びは一入でした。直接自分の肌で中国を感じた事で、一層中国への親しみや興味が増し加わりましたし、逆に日本の良さを再認識する事も出来ました。二松学舎で中国語を学んだ事によって、多くの貴重な経験をする事が出来ましたし、自分の視野も大きく広がったと思います。もちろん大学では中国語以外にも多くの事を学びました。特に三年次からの野村邦近先生の中国近現代文学ゼミで得たものは大きいものでした。ゼミでは魯迅について研究しましたが、魯迅の作品は非常に難解で、理解する為には時代背景の考察や他の執筆作品との比較など、幅広い視点を持つことや様々な角度から切り込む事が必然的に要求されました。ゼミの研究を通じて、魯迅に限らずあらゆる物事の本質を見極める方法や力を身に付ける事が出来たと考えています。さらに毎週、研究内容をレジュメに纏めて発表をしていたので、自分の考えを簡潔にまとめ、それを人に理解できるように説明する能力も養える事が出来ました。野村先生には学問だけでなく、社会人として生きていく上で必要な技術も教えて頂き、本当に感謝しています。野村ゼミで二年間学んだ事は、これから社会へ出て行く私にとって大きな自信となりました。二松学舎で過ごした四年間は、これからの長い人生の中で考えればごく僅かな期間に過ぎないかもしれません。それでも、全力で学び、全力で遊んだこの四年間で得たものは計り知れず、自分自身を大きく成長させる事が出来ました。二松学舎での四年間は今後の人生の糧に必ずなっていくと確信しています。この場をお借りして、お世話になった先生方、共に学んだ学友達、そしてこれまで私を支えてくれた全ての人達にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。四月からは横浜市役所の職員として働きます。横浜は日本最大の中華街を有し、中国人が大勢暮らす、最も中国との交流が深い都市です。今後は仕事において、二松学舎で学んだ知識や経験を活かして活躍していきたいと、今は期待と希望に胸を膨らませています。

『大学生活を振り返って』

国際政治経済学部
永井景子

四年間を振り返ると、不思議と短く感じた。一年次、二年次は一年間がとても長く感じていたのに、四年次は「あっ」という間の一年で、今は卒業できる嬉しさがあるが、寂しさもある。私の大学生活は学業中心だった。決して勉強は好きではない。他にも経験したいことがあったが、大学では学業に一番力を入れたからである。高校生の時、授業で触れた法律・政治・経済に興味を持ち、もっと詳しく、また日本に限らず世界にも触れることで、世の中で何が起きているのか学びたいと思い二松学舎大学に入学した。

学生生活が始まると高校とは違い、受ける講義を自分で決めることから全てにおいて自己管理・自己責任が求められる為、戸惑うことばかりだった。九十分と長時間の講義に加え、内容の難しさに日々不安を感じ、大学に行くことが苦に思えることもあった。しかし通学中に自分の過去を振り返っていたとき、学業に対する姿勢が変わった。きっかけは「中学・高校時代もっと勉強しておけばよかった」という後悔の気持ちである。このままでは、社会人になったときも同じ思いをすると考え、悔いを残さないためにはこれがラストチャンスだと思い、学業に専念することに決めた。

通学が片道約三時間だったので通学中は全て予習・復習を行い、講義中は黒板の写しだけでなく講師の口述も出来るだけメモし、分からない語句は辞書ですぐに調べるなどして独自のノート作りを行い、講義内容が分からない場合はそのままにせず、友人や講師の方に分かるまで聞いた。英語以外の語学も履修していたので、語学に関しては暇さえあれば勉強することを心がけた。

二年次では法律と政治に興味があったので、専攻は法・行政を選択。履修は、様々な事を学びたい、絶対に進級したいという思いから多くの講義を受講した。レポート課題やテスト勉強で大変なときもあったが、友人と励まし、支え合うことで乗り越え、全ての単位を修得出来たときは大変嬉しかった。また、学ぶことで自分の考えや視野が広がることに嬉しさを感じたことを思い出す。

三年次では大学の勉強以外に就職のための勉強も始めたので、予習・復習・課題は通学中、就職の勉強は自宅で行った。講義では、日本や世界の社会問題に触れることが多く、知識を増やすだけでなく、自分の意見や考えを持つことの大切さを学んだ。この経験から、ニュースや新聞を見る際に、ただ情報を入れるだけでなく、内容に対する自分の意見や考えを持つことを習慣づけた。このことは後に就職活動に役立った。

四年次は殆ど就職活動の日々で、どのような社会人になりたいのか、どの職種に適しているのかなど、自分について色々考えていた。自己分析、エントリーシート、筆記試験、面接、全てのことが初めてで不安を感じ、なかなか思うように進まないと悩み、諦めそうにもなった。しかし、友人の応援や家族の支えにより、乗り越えることが出来た。私にとってこの経験は一生忘れることのできないものとなった。

改めて学生生活を振り返ると、本当に多くのことを学ぶことが出来た四年間だったと思います。しかしそう思えるのは、私の努力だけではなく、友人や家族の支えがあったからです。四年間、何不自由無く学業に専念させてくれた家族、楽しいときも辛いときも常に一緒にいてくれた友人に心から感謝します。これからは社会人として、大学で学んだことを活かし、挑戦することを忘れず、前向きに生きていきます。

私の学生時代

副学長
渡辺和則

私は大学で数学を勉強したかったが、その希望は叶わず経済学を勉強することになった。だから一年生の時は授業にはよく出席していたが、自ら積極的に何かを勉強しようとは考えていなかった。ところが二年生の時に履修した『経済原論』の五月の授業で、サミュエルソンのEconomicsというテキストとアダム・スミスの『国富論』についての講義を聞いた時、その内容が私の脳の中に何の抵抗もなく浸透してきたのである。だからその時、私は何の躊躇いもなくサミュエルソンとスミスの本をぜひ読んでみたいと思った。

そこで私は早速、Economicsとその邦訳書の『経済学』、さらにスミスの『国富論』を購入して読み始めたのである。サミュエルソンのテキストは、辞書を引きながら訳文をノートに書き、訳本の文章を参照して、誤訳した箇所や文章は原文と訳書の文章をその学科の卒論は朝鮮資料『捷解新語』であった。韓国に没頭するようになった私は以前に増してひたすら外国語の天才柿原先生に傾倒した。

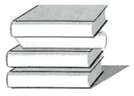
先生はハイデガーのゼミナールに独逸人と同じように参加してハイデガーが自ら学位を授けた唯一の日本人であった。先生が実践されたことを全て韓国語の勉強でまねようとした。私は韓国に留学するが先生をまねて行けば当然そうなるのであった。

先生の周囲には大学の内外の若いまま暗記するという方法で読んだ。また、辞書を引いた単語は全部ノートに書いて単語帳を作り、それを暗記した。当初はこの作業にかなりの時間がかかったが、どういうわけか苦痛を感じなかった。だから毎日その作業を続けることができた。

また、授業の中で「神の見えざる手」が頻繁に使われたので、『国富論』の中でもそれは相当に強調されているのだろうと思った。しかしそれを読み進んでいってもなかなかその語句は出てこなかった。

『国富論』は全五編からなるが、使われていたのは「神の見えざる手」ではなく「見えざる手」であった。しかもそれは第四編第二章で一度だけ使われていたのである。そのことを知ったときの感激は今も鮮明に記憶の中にある。

このような二年生の時の体験が基になって、私は経済学を本格的に勉強するようになったのであるが、私の授業を受けた学生の中にも私と同じような体験をした人がいて欲しいと思う。



学務局長
渡邊了好

六十年代末の大学は学園紛争華かであった。私が入学した成蹊大学も直ぐ休校となった。何ヶ月も授業が無ければいくらでも自由に勉強できる。良い時代でもあった。休校掲示の前で運命の師柿原篤弥先生に出会い独逸語を習うことになり、中国語を善隣書院で、韓国語は新日本文学会で習った。授業が再開しても外国語を勉強する日々であった。日本文学や、ハイデガーのゼミナールの方法、独逸人の生活と考え方等、独逸で経験されたことを生き生きと語られる。至福の時であると同時に、そこに語られる独逸は人生をかけて彼の地に学んだ者のみが知り得る真実であり、私にお前も「お前の彼の地」に行けと覚悟を促すものでもあった。

この頃の成蹊の記憶は十何年かに及ぶ韓国生活でいつ想い出しても勇気が湧いて来る永遠の命のようなもので、それを私は先生に頂いた。

宴果てて終電が尽きれば先生のお宅に泊めて頂き、朝ご飯を頂き、先生と一緒に奥様の車で大学まで送って頂いた。私が韓国へ旅立つ時、先生は、女子学習院に学ばれた先生のお母様の手になる、お母様の同級生であり李朝最期の王妃であった李方子妃殿下宛の紹介状を下さった。

私だけが特別に愛されたのではない。勉強会の十人程の人々は全て大学の教師になっている。先生にして頂いたことの何百分の一でも若い学生諸君にお返しして行きたい。

開通褒斜道刻石と馬橋駅

二松学舎大学教授　源川彦峰

源川彦峰が漢代の摩崖の刻石・「開通褒斜道刻石」（古隷）を臨書した作品が、狭西省の漢中博物館（漢の劉邦の宮殿跡地、摩崖の刻石を保管展示している）に勒石入座（石に刻して建てること）されたのが、平成十四年八月二十四日でした。それから七年が経ち、博物館から「それを記念して式典の儀式を開催するので出席するように」と招聘状がもたらされました。丁度この四月、四川省の大地震があり、私の碑も倒壊したものと思っていました。ところが、余震を避けて石碑を引き抜き、避難させておいたと言うのです。それ程私の臨書の勒石を大切に思ってくれていることに胸が熱くなりました。

漢中は三国時代の蜀の国に当たる場所です。ここは険しい山岳地帯に位置していて、そこから魏を攻めるには秦嶺山脈を越えるか、渓谷にへばりつくように架設した桟道を通るしかありません。艱難辛苦の果てに桟道を架設することは大変な難事業でありました。故に桟道開通の喜びは一入のものがあったと想像されます。その喜びを断崖に刻んだのが摩崖の刻石で、その雄が開通褒斜道刻石でもあるのです。私の臨書作がその博物館に摩崖の臨書作の資料として建てられているのです。この臨書作品は、彦峰三十二歳（昭和五十五年）の時の作品です。今から二十八年前の作品ということになります。その時、私の住んでいる馬橋駅の三字が開通褒斜道刻石の銘文の中に有ることに気付き、駅名を板に凸彫りにし、金箔押しで仕上げて贈りました。それは現在も馬橋駅に掲げられています。また、その駅舎の看板は七年前の勒石入座の折りに出版した『開通千載』という記念誌にも写真を掲載しており、中国でも「開通褒斜道刻石の文字が駅舎の看板になっている」ことで評判になっています。私は、当年六十歳です。二十八年前の三十二歳の時の若書きの作品がかの地で石碑になっているのです。少々照れくささもありますが、それも永年斯道に精進していく過程の一里塚であるから、今後も責任を持って精進すべしと自彊息はずの気を強く致します。

右から2番目　源川教授

第12回 二松学舎大学2008年度春期中国語・歴史文化研修について

平成21年2月20日（金）～3月12日（木）の21日間、12名の学生が参加し、中国語学研修が実施されました。父母会では、海外研修学生引率者への助成を行っています。

次回の会報にて、引率者及び参加学生から中国語研修の報告を掲載いたします。

平成21年度二松学舎大学日程表

年	月	日		月	日	日　程
平成21年	4	1	～	4	11	ガイダンス
	4	3				入学式
	4	上旬				新入生歓迎式典
	4	13				春セメスター授業開始
	4	20				前期授業料納入期限
	4	30	～	5	2	全学休講
	5	中旬				定期学生大会
	5	30				父母会定期総会
	6	20	～	6	21	学園祭（柏）
	6	27	～	6	28	学園祭（柏）
	7	15				授業終了
	7/13·14·16～18·21					補講期間（6日間）
	7	22	～	8	4	試験期間
	8	5	～	9	25	夏期休業期間
	8	12				追試験
	9	1	～	9	15	夏セッション（15日間）
	9	25				秋セメスター授業開始
	9	30				春セメスター卒業式

年	月	日		月	日	日　程
平成21年	10	10				創立記念日
	10	20				後期授業料納入期限
	10	31	～	11	3	学園祭（九段）
	12	上旬				防災避難訓練
	12/16～18·22·24·25					補講期間（6日間）
	12	21				年内授業終了
	12	26	～	1	6	冬期休業期間
平成22年	1	8				授業再開
	1	18				授業終了
	1	19	～	2	1	試験期間
	2	4	～	2	5	卒業研究面接試問（文学部）
	2	9	～	2	10	修士論文面接試問
	2	12				追試験
	3	上旬				卒業・修了者発表
	3	中旬				ゼミ登録許可者発表（文学部） 進級者発表（国際政経）
	3	24				大学院修了式
	3	25				学部卒業式

定期総会

平成二十一年度 父母会定期総会開催について

左記の日程で、平成二十一年度二松学舎大学父母会定期総会を開催いたします。

当日は、講演会を予定しております。

日時・平成二十一年五月三十日（土）
場所・九段校舎
内容・平成二十年度事業報告並びに決算
・二松学舎大学父母会会則の一部改正
・平成二十一年度役員選出
・平成二十一年度事業計画並びに予算

一年次生～三年次生の会員の皆様には、平成二十一年度定期総会のご案内と出欠票（委任状）を父母会報第六四号に同封しておりますのでご確認下さい。また、準備の都合上、ご出欠を同封の出欠票（委任状）で五月二十日（水）までにお知らせいただきますようお願いいたします。

なお、定期総会資料につきましては、五月中旬に送らせていただきます。

学生顕彰報告

躰道部（団体）
平成二十年十月二十五日に開催された「第四十二回全国学生躰道優勝大会」で、男子団体実践競技の部で準優勝、団体展開競技の部（男女）で三位入賞した。

躰道部（個人）
平成二十年十月二十五日に開催された「第四十二回全国学生躰道優勝大会」で、男子個人実践競技の部で国際政治経済学部四年の柴山侑大さんが準優勝した。

課外活動団体助成報告

落語研究会
「噺　寄席」への学外発表会会場借用助成。

劇団こんにちはシアター
「秋公演」への学外発表会会場借用助成。

狂言研究会
「狂言研究会自演会」への学外発表会会場借用助成。

吹奏楽団
「定期演奏会」への学外発表会ポスター印刷助成。

合唱団コールエコーズ
「定期演奏会」への学外発表会会場借用助成。

学生相談室だより64

カウンセラー・教授　白石　まりも

ご入学・ご進級おめでとうございます。柏校舎の校庭や九段の坂には、学生の皆さんを祝福する様に、桜の花が咲き誇っている事でしょう。今まで子供だと思っていたのに、いつの間にかこんなに大きくなって！と感慨深く過ごされた方もいらっしゃるのではないでしょうか。

我が家にも受験生がいました。彼曰く、人生初の挫折を味わい今までにない位考えたそうです。時々苛立ち、理不尽な事を言ったり、小さいけど三十五年ローンのマイホームの壁に穴を開けたりと、ドウシチャッタノ、この子は！と思う事もありました。思わず、ひとりで大きくなった様な生意気言うんじゃない！という言葉が喉まで出かかりました。この言葉は、十代の頃私が母に言われた言葉です。そういえば、と過去をいろいろ振り返ってみました。確かに、不安定だった十代の時は、理由も無く両親に反抗的な態度をとったり、わざと怒らせる言葉を投げつけてみたりと、決して良い子ではなかった事を思い出しました。そんな私を両親は、時には優しく時には厳しく見守ってくれていました。そう、確かにひとりで大きくなった訳ではないのです。ただ、それに気付いたのは親になって、子供と関わってからです。親になって、初めて親の気持ちが分かったのだと思います。両親に感謝できる自分を嬉しく思います。

お子さんは、これから新しい環境に適応していかなければなりません。親子で話し合ったり友達に相談する事で乗り越えられる程度の悩み事なら良いのですが、部屋から出てくる事が出来なくなったり、食事が取れない・眠れないなどの、生活に変化がありましたら、相談室を思い出して下さい。ご父兄の方からのご相談も受け付けております。お子さんの出しているシグナルを見落とさないで下さい。

キャリアセンターだより⑭

新年度がスタートしました。本学の一員となられた新入生のご父母の皆様、入学おめでとうございます。

さて、左の文章は、この三月に本学を卒業した文学部女子新卒業生が書いたものです。

私の二松学舎大学での生活は人に恵まれた四年間でした。一年次の基礎ゼミをはじめ、専攻の授業などで出会う先生方や友人は皆、久しく努力することを忘れていた私に火をつけてくれる人ばかりでした。三・四年次のゼミでは担当教員に厳しく指導されることもありましたが、先生の知識の深さにいつも驚きを隠せませんでした。閉館間際の図書館でゼミ生に会うのは最早当たり前の光景になっていました。私が二松学舎大学に入学を決めたのは、日本文学について様々な角度から学べるということと、就職活動にどの大学よりも力を入れていると感じたからです。

そのため、本学一本に絞ったことを両親は非常に心配していましたが、私の学生生活の様子を見て、二松学舎の魅力に気付いたようです。

就職活動も、キャリアセンターのご指導のおかげで第一志望の企業から内定をいただくことができ、本当に感謝しています。あの時二松学舎を選択したことはやはり間違っていなかったと断言できます。

いかがでしょうか。素晴らしい学生生活を送った満足感に溢れています。

大学の基本は、なんと言っても授業なのです。知性を磨き友人と議論し教員の、時には厳しい指導を受けて成長するのです。それらすべてが卒業後の進路選択と就職活動の根幹となるのです。就職活動の仕方や考え方はキャリアセンターが万全の体制で支援いたします。学生には、安心して全力で授業に邁進して欲しいと願っています。そして、キャリアセンターの諸講座には出席して欲しいのです。

《小山ゼミナール》

私たちが所属する小山ゼミでは、中世日本の文化史や宗教史を研究しています。小山ゼミの大きな特徴は、文字史料だけでなく、絵巻物を用いて考察していくことです。ゼミでは、実際に一つの絵巻物を用いて、基本的な研究方法を学びます。来年度の三年生は『信貴山縁起絵巻』を読み解く予定です。

担当の小山先生は、私たちゼミ生の不安や疑問を受け止め、適切なアドバイスをくれます。ただ答えを教えるのではなく、答えを導くためのヒントを提示する方法は、自ら考える力を養うことができました。

合宿はフィールドワークが中心です。事前学習を行い、知識を深めた上で様々な史跡を巡ります。実際に自身の足で巡り目で見ることは、座学では味わえない貴重な時間です。

当時の文字史料には書かれていないものが、絵巻物には描かれていることがあります。

例えば、人々の表情や仕草など、文字では残らないことが、絵巻物からは読み取ることができます。

発表者がレジュメで説明すると、先生から質問が次々と出されます。質問は発表者だけに限りません。ゼミの人数が少ないので、授業の間は全員がけっこう集中して考えなければならず、緊張感があります。ゼミの準備にはふだんの情報収集が欠かせません。

授業のほかに、二日間かけて東京の中心部をみんなで歩きまわったこともありました。東京の下町で生まれ育った先生の案内で、近代の痕跡を訪ね、学校、公園から水道施設、陸橋、墓地なども見てまわりました。一日中歩き回って大変疲れましたが実際にいろいろ見学すると強いイメージが残ります。

どんなことでも身近なこと、具体的なことから考えてみようというのが先生の口癖ですが、たしかにそうすることで、日本に隣り合う韓国や中国だけでなく、地球の裏側の出来事も、自分と関係ある問題としてとらえられるような気がしてきます。

《佐藤ゼミナール》

私たちが学ぶ佐藤（一）ゼミでは、東アジアの地域社会の動きを文化の観点からとらえようとしています。さまざまな社会的差別、他の集団との摩擦や衝突、インターネットの発達による情報の氾濫など、現在の社会がかかえる多くの問題は、文化と深く結びついているということで、ゼミでは色々な資料を読んでいきます。新聞や雑誌の記事から研究論文、ときにはエッセーや小説も取り上げます。

絵空事とも言われるように、絵巻物に描かれているものが、必ずしも事実であるとは言えませんが、当時の人々の生活や考え方を紐解く上で、絵巻物は大きな手がかりになると思います。

また、様々な角度から物事を考察するということは、学問に限らず多くの場面で必要とされることだと、私は思います。

ゼミ探訪

父母会事業計画の一環として毎年開催されている地区別父母懇談会の平成二十四年度までの開催予定をお知らせいたします。当懇談会は、四十七都道府県を七つのブロックに分け、四年に一度は必ず各県または隣接県に大学の教職員が出向き、大学の現況や学生の生活状況等について説明を行い、教職員と父母、父母同士の親睦を深めるために開催されています。大学の活性化の一翼を担うという意味で大いに注目されています。

懇談会の内容としては、大学の現況報告、学生の学習状況及び学生生活の報告、意見交換等が予定されています。希望者には個人面談も行っています。

平成二十一年度の開催予定地区は、開催日順では、北海道・愛知県・茨城県・東京都（九段校舎）・千葉県（柏校舎）・富山県・沖縄県・香川県・宮崎県の九会場を予定しております。

大学への質問及びご意見・ご要望などを大学関係者と直接お話いただける絶好の機会です。この機会を是非利用していただきたいと思います。父母会事務局では、この企画を父母にとって有意義なものとするためにも多くの参加を希望いたします。フリー参加形式としておりますが、全ての会員の皆様には改めて出欠確認のため開催案内をお送り致します。

ご不明な点がございましたら父母会事務局にご連絡下さい。

（TEL 04-7191-8756）

地区別父母懇談会年次開催計画案

開催年度	平成21年度		平成22年度	平成23年度	平成24年度
開催予定県	北海道（札幌市）	6月20日（土）	岩手県	山形県	青森県
	愛知県（名古屋市）	6月20日（土）	宮城県	福島県	秋田県
	茨城県（水戸市）	6月20日（土）	千葉県（柏校舎）	群馬県	栃木県
	東京都（九段校舎）	7月　4日（土）	東京都（九段校舎）	東京都（九段校舎）	東京都（九段校舎）
	千葉県（柏校舎）	7月11日（土）	長野県	千葉県（柏校舎）	千葉県（柏校舎）
	富山県（富山市）	7月18日（土）	広島県	石川県	新潟県
	沖縄県（那覇市）	7月18日（土）	山口県	山梨県	福岡県
	香川県（高松市）	7月25日（土）	高知県	静岡県	鹿児島県
	宮崎県（宮崎市）	7月25日（土）	大分県	大阪府	
				岡山県	
合計	9県		9県	10県	8県

編集後記

父母会報六十四号をお届けします。

卒業生の父母の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。今年も帝国ホテルで盛大なパーティーを行いました。

今年度は、政治・経済・教育・福祉等「変」な事がたくさんあり、就職活動にも多いに影響してしまい、親として、人として、これからの日本はどうなってしまうのだろうと不安な気持ちにさせられた一年でした。役員として、せめて本校学生でいる間だけでも安心して生活が送れるようにサポートしてきました。又、学校サイトには、社会人向けに公開講座があったりと学校関係を色々知る事ができるようになっています。

昨今、情報源は多く、知りたいと思えばいつでもどこでも得る事ができる反面、その風潮に流されてしまい精神的に、肉体的にも病んでいる人がたくさんいます。自分の身は自分で守っていける術を身につけなくては生きて行けません。その手段の一つとして、この父母会を利用してみてはいかがでしょうか。

長い人生です。大いに自己啓発をしましょう。光陰矢の如し、切磋琢磨して不言実行。今すぐ二松學舎大学にクリックしてレッツ・トライ！